

41860

教科書文庫

4
815
44-1968
20000 67676

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

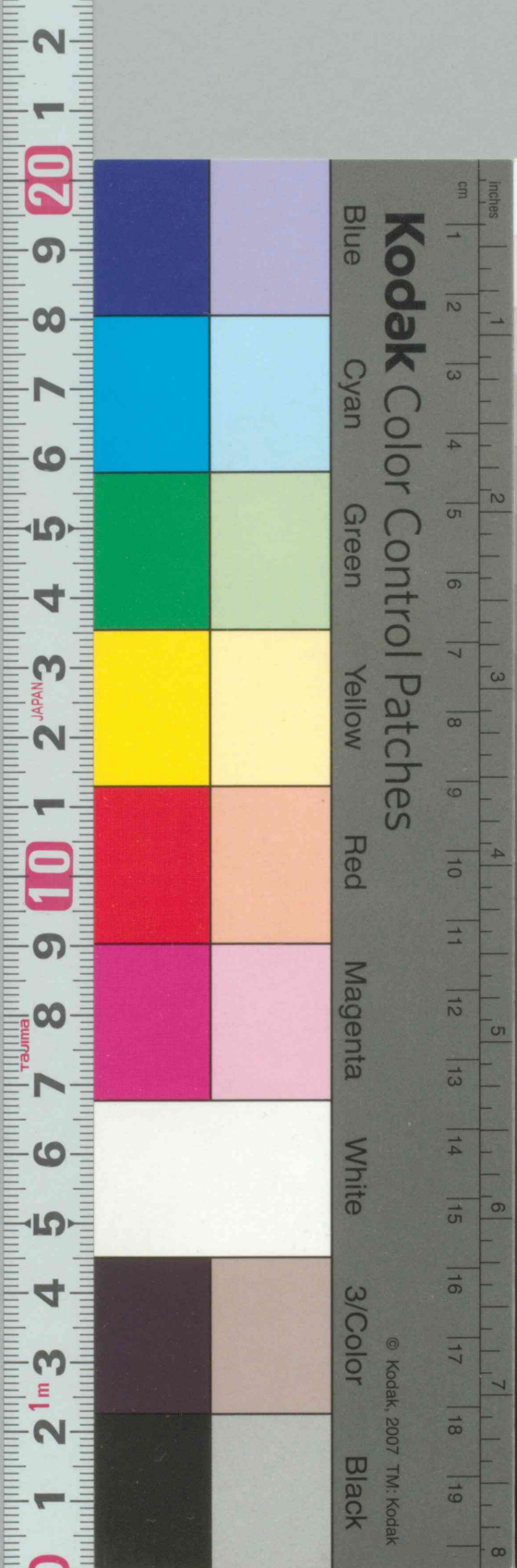


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
815
明40



民國六年五月十四日
衡寶劍譜

田家瑞

衡寶劍譜

衡寶劍譜

85810

資料室

42
815
B140

明治四拾壹年壹月六日

文部省檢定

山田孝雄著

中等文法教科書

東京寶文館藏版



中等文法教科書卷三目次

第一章	準體言	一
第二章	連體語	四
第三章	單文、重文、合文	九
第四章	動詞の活用(一) 奈行變格活用	一四
第五章	動詞の活用(二) 三段活用	一七
第六章	動詞の活用(三) 四段活用	二二
第七章	動詞の活用(四) 二段活用 一段活用	二三
第八章	動詞の活用(五) 良行變格活用	二六
第九章	形容詞の活用	三三
第十章	助動詞(一) 未然形附屬のもの	三五

目次

第十一章 助動詞(二) 連用形附屬のもの……………四二

第十二章 動詞の音便……………四五

第十三章 助動詞(三) 終止形附屬のもの……………四九

第十四章 語の順序……………五三

中等文法教科書卷三目次終

中等文法教科書卷三

第一章 準體言

一 主語となり、補語となるものは主として名詞、及、代名詞なり。しかるに用言にても又かく用ゐらるゝことあり。

はじめなるは已に林麓におちぬ。

見わたすかぎりなつかしからぬはなし。

これらは主語となれる例なり。

勤勉なる人はわづらはしきを厭はず。

風浪何ぞ恐るゝに足らむ。

愛憐の情りすきに似たり。

あゝ日本は松國たるべし櫻花國たると相待たざるべからず。

これらは補語となれる例なり。かくの如く形容詞動詞にて體言と同等に用ゐらるゝものを準體言といふ。

二 形容詞「如し」の補語となれる名詞は助詞「の」を伴ふに、準體言がその補語となれるものは

その禮儀は至つて正しきが如し。

往來織るが如し。

の如く、助詞「が」を伴ふものと、

歲月は流るる如し。

文字は繪より出でて遂に今用ゐる如きものとなれり。

の如く全く助詞を伴はぬものとあり

三 準體言はその用言の意義上の必要よりして更に補語を伴ふものあり。次の例を見よ、

耻を知らざるは人にあらず。

これを處する又この法に従ふべし。

規律を破るなかれ。

植物を栽培するを耕種といひ、動物を飼養するを養畜

といふ。

大旱にも河川を涸らすに至らず。

これ道に違あるにあらず。

これみな小事を忽にするより起れり。

眞にバノラマを見るが如し。

問題一、主語又は補語となるは體言に限るか。

二、準體言とは何ぞ。

三、形容詞如しの補語たる準體言の用の方を説け。

四、補語を要する用言が準體言となる時の形如何。

練習一 次の文中の準體言を抜き出し、それが主語なるか補語なるかを指定せよ。

一、車を走らするもあり、馬に乗るもあり。

二、まことに賞するにたへたり。

三、すぎたるは及ばざるが如し。

練習二 次の用言を適當なる準體言として文をつくれ

一、赤し。 緑なり。 二、勇敢なり。

三、見ゆ。 四、製造す。 五、得べし。

第二章 連體語

四 (イ) 彼は徒弟となれり。

(ロ) 資本は結果なり。

上の例に於いて(イ)はこれにても意義通ずれども(ロ)は資本は何の結果なるかをいはぬ時は意義不明なり。これを

資本は貯蓄の結果なり。

とする時ははじめて意義を十分にあらはしたるものといふべし。(イ)の例もそのままにてわからぬにはあらねどなほ

彼は大工の徒弟となれり。

とする時は一層明瞭となるべし。かくの如く體言の上につきてその意味を委しくせむが爲に用ゐる語をば連體語といふ。

五 名詞が連體語となる時は上の例の如く助詞のを伴ふ

ものなれども代名詞が連體語となる時は「の」又は「が」を伴ふものなり。

わが資本はおのれの貯蓄の結果なり。

予が朋友は彼れの徒弟となれり。

六 連體語となるものは名詞代名詞の外に形容詞も動詞もあり。この時には通例助詞を伴はず。

新しき生活は始まり、ばげしき格闘は開かれたりき。

異なる郷の珍らしき花禽を目にす。

爲すべき事はまことに多し。

七 用言が連體語たる時は補語を伴ふことあり。
情を知らざる車夫に促されて去つて山の一角の海に臨める處に行く。

八 用言が連體語たる場合に連體語の下に「の」を附屬せしむることあり。

一世を驚かすの事業を成し遂げむと心がけるたり。

百折撓まざるの決心を以て従事したり。

九 連體語となるものは體言及用言なれども、副詞となることをうべき漢語も亦連體語として用ゐらる。この時は「の」といふ助詞を伴ふを通例とす。

官吏として重要な職にありき。

非常の用に備へ給へ。

自然の道理なり。

一〇 國語の副詞も時として連體語となることあり。
わづかの迂路をせざるが爲に名勝を見残すことあり。

そは實に尤もの事なり。

但、これは慣例あるものに限るものとす。

問題一、連體語とは何か。

- 二、連體語となりうる單語の種類をあげよ。
- 三、體言が連體語となる時の方法如何。
- 四、用言が連體語となる時の方法如何。
- 五、副詞が連體語となる時の方法如何。

練習三 次の文中の連體語を抜き出せ。若之に伴ふ補語あらば全時に之を指示せ。

- 一、配當を得たる翌日はたまたま日曜日なりけり。
- 二、無限の感慨を抱きて苦しき病床に横る。
- 三、いつしかわが庭の夏も來りぬ。
- 四、君が更なる勤勉を祈り、君が有望なる前途を祝す。
- 五、有用なる人物として一社の尊敬を一身に擔ひき。

練習四 次の文中に指定せられたる單語より成る連體語を補へ。

- 一、日章旗は(代名詞と助詞)名詞と助詞(國旗なり)。
- 二、(副詞となり)業務に従事するも誠實を要す。
- 三、夕風をよ吹き(名詞と助詞と動詞)日影も次第に薄らなりぬ。
- 四、(如し)人は甚珍し。
- 五、(より)をのこの補語をもちたる動詞(事業を鑛業といふ)。

第三章 單文、重文、合文

一 花紅なり。

二 月清し。

三 小兒犬と戯る。

四 我庭に梅を植う。

以上の例は皆句なるが、主語と述語との結び付けの唯一回

なるを見るべし。この故に句を更に次に次の如く定義す。

一の句とは主語と述語との結び付けの一回なるものをいふ。

一二 (イ) 花咲く。鳥なく。

(ロ) 花咲き、鳥なく。

この(イ)(ロ)を比較せよ。共に獨立せる二の句なれども、(イ)は二句互に獨立なるに(ロ)は二句を合して一の文となす。かくの如く文の組立によりては一の句より成るものあり、多數の句を合してなせるものあり。かくて一の句にてなる文をば稱して單文といひ、多數の句よりなるものと區別す。

一三 (イ) 花咲き、鳥なく。

(ロ) 花咲けば、鳥なく。

この二文を比較せよ。共に二の句よりなり、中なる單語も類似たれども、その二句の關係は異なり。(イ)は二の句を唯重ねたるにすぎざれども、(ロ)は二の句相合して一の新しき意ある文をなせり。(イ)の如きを重文といひ、(ロ)の如きを合文と名づく。

一四 人は歩み、犬は走る。

犬は走り、人は歩む。

かく單文たる二の句を重ねて重文とする時には上の句の述語の形をかへて重ねるなり。而、上の句をば上句といひ、下の句をば下句といふ。

一五 重文をつくるには上の句の述語の形をかふるにて足れども合文をつくるには上の句の述語に助詞を添へざ

るべからず。この爲に用ゐらるゝ助詞は「ば」「と」「ども」「とも」「が」「に」「を」等なりとす。

花は咲けども鳥は鳴かず。

花は咲くとも鳥は鳴かざらむ。

花は咲くが鳥は鳴かず。

花は咲くに鳥は鳴かず。

花は咲くを鳥は鳴かず。

合文にありては助詞の附屬せる句を伴句といひ、下なる句をば主句といふ。

問題一、一の句とは如何なるものか。

二、單文とは何か。

三、重文とは何か。その各句は何といふか。

四、合文とは何か。

五、合文は如何にして生ずるか。その各句は何といふか。

練習五 次の文は單文なるか、重文なるか、合文なるか。

一、彼等もし望まば何人も容易になしうべし。

二、印度は遂に英に歸し、米國は英領と合衆國とに分れぬ。

三、新しき生活ははじまり、烈しき格闘はひらかれたり。

四、綠玉碧玉頭に蓋を綴れば、わが面も青し。

練習六 次の各單文を結合して指定せる文になほせ。

一、風吹く。雨ふる。浪高し。
(重文)

二、庭の花咲く。我汝に通知せむ。
(合文)

三、彼甚工夫をこらしたり。未だその効なし。
(合文)

四、農は耕種す。工は製造す。商は交易す。
(重文)

五、ことば多し。品少し。
(合文)

第四章 動詞の活用(二) 奈行變格活用

一六 動詞の活用の模範となるべきものは奈行變格活用なり。今この活用につきて考ふるに普通の述語となるは「死ぬ」なり。これを終止形といふ。連體語となるは「しぬる」なり。かく用ゐる形を連體形といふ。

しぬる人あり、生るゝ人あり。

連體形はいつにても又準體言として用ゐらるゝものなり。

義に望みては死ぬるをもいとはず。

又重文の上句の述語として用ゐらるゝは「しに」なり。

冬に至れば昆蟲は或は死に、或は蟄す。

この形は重文をつくるのみならず。

かくてかれは彼の地にて死にうせたり。

の如く用言に連ぬるにも用ゐらる。これを連用形といふ。さて又合文をつくる時に「ば」及「ども」に接する形あり。

我今御國の爲に死ぬれば、遺憾とする所更になし。

命はかくて死ぬれども名は千載も朽ちず。

かくの如きものはその意義はその條件の已に定まれることを示すものなるが故に已然形といふ。全じく合文をつくる時に「ば」に接して未定まらざる條件を示す形あり。(この時は「ども」には接せず。)

徒らに死なばいかにくちをしからむ。

かくの如く用ゐらるゝ形を未然形といふ。又次の如く、

汝も日本男子なり、潔く國の爲に戰場にて死ぬ。

希望又は命令放任をあらはす形あり。之を名づけて命令形といふ。以上あげし六の形は即活用の標本なり。

未然形

連用形

終止形

連體形

已然形

命令形

(死)な(ば)

に(給ふ)

ぬ

ぬる(人)

ぬれ(ば)

ね

一七 「死ぬ」は文語にては活用右の如く分るれども、話語にては「死ぬる」「死ぬれ」の二の活用は滅びて連體形と終止形と

一になり、已然形と命令形と一になれり。

未然形

連用形

終止形

連體形

已然形

命令形

死(な)ぬ

に(ます)

ぬ(人)

死ね(は)よ

問題一、奈行變格活用の六形を命名せよ。

二、準體言となりうべき活用は何か。

三、重文の上句の述語となりうべき活用は何か。

四、合文の伴句の述語となりうべき活用は何か。

五、「死ぬ」といふ語の活用につきて文語と話語との比較をなせ。

第五章 動詞の活用(二) 三段活用

一八 今奈行變格を模範として三段活用を比較するに、これは活用の數五なれば、勢一の形にて二の用をかねざるべからず。その加行活用に於けるものは

未然形

連用形

終止形

連體形

已然形

(來)こ(は)

き(給ふ)

く

くる(人)

くれ(ば)

となりて「こ」は未然形と命令形をかぬ。而、命令形なる「こ」は通例、助詞「よ」を添へて命令の用をなすものなり。
一九 この動詞は文語にても話語にても同じく三段活用なれども、形の上に少しの差あり。即文語にては

「く」を山田の霧の中道ふみわけて人くとみしはかゝしな
りけり。
の如く「く」を以て終止形とせるに話語にては「く」といふ活用
全くなくして「くる」を以て終止と連體とに使用するなり。

未然形 命令形	連用形	終止形	連體形	已然形
く(ぬ)	き(給へ)	くる(人)		くれ(ば)

二〇 左行三段活用は左の如し。

未然形 命令形	連用形	終止形	連體形	已然形
勉強(せよ)	し(給へ)	す	する(人)	すれ(ども)

この動詞も亦未然形と命令形とは一にして命令形は「よ」を
添へて始めてその用を全くするものなり。

二一 この動詞も亦話語の時は終止形と連體形と一にし

て「ず」を失へり。

未然形 命令形	連用形	終止形	連體形	已然形
せ(ぬ)	し(給へ)	する(人)		すれ(ば)

二二 この「ず」といふ動詞は名詞、漢語、外國語等を動詞とす
る力を有するものなり。この故に次の如きは皆一の動詞と
なりて、**左行三段活用**をなせるものなりとす。

ざんぶと音しておぼろの波の蘆の葉わけゆく。
大事業をなさむには自ら信じ自ら任ずること重から
ざるべからず。

その差違はこれを約言すれば内外の二字に歸す。
當時世人鑛業に従事するものを山師と呼びてこれに
大資本を投ずるものなし。

いさゝかの費用も輕んずることなし。
 節儉自ら持し、責任を重んじ、熱心にして倦まず。此の
 二三「す」は「投ず」「輕んず」「重んじ」「信じ」「任ずる」の如く濁音
 となることあり。

問題一、三段の各活用を指名せよ。

二、名詞を動詞とせんには如何なる方法によるべきか。

三、漢語を載ける動詞五をつくり示せ。

練習七 次の文中の話語を文語になほせ。

一、露兵東西より攻めくる。

二、死ぬ覺悟で進んだ。

三、大野君は教壇で代敷を説明する。

四、死ぬも生きるも天命だ。

練習八 次の語を下の活用につけて文を作れ。

- | | | | |
|----------|-------|---------|-------|
| 一、逍遙、螢狩、 | す、せ、 | 二、愛、賞、 | す、し、 |
| 三、勉強、進級、 | せ、すれ、 | 四、信、従事、 | す、する、 |

第六章 動詞の活用(三) 四段活用

二四 四段活用は

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(行)か(ば)	き(給へ)	く(ん)		け(ども)	

の如く終止形と連體形とを一にてあらはし、已然形と命令形とを又一にてあらはせり。而、命令形はそのまゝにて命令をなすことをうるなり。

二五 文語の四段活用ものは話語にても亦四段活用なり。然れども、その未然形は助動詞につゞくるのみとなり、已

然形は未定まらざる条件をも示す様になれり。而上にいひし奈行變格の「死ぬ」も話語にては四段活用となり、その未然形及び已然形も話語の四段活用に同じくなれり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
行か	き	く	く	け
死な	に	ぬ	ぬ	ね

問題一、六種の活用の形を四段活用に指定せよ。

二、文語の四段活用は話語にては如何に活用するか。

三、連用形の用法を問ふ。

練習九、次の文中の各動詞の活用を命名せよ。

- 一、楮の皮より織緯を採り之を製紙の原料となす。
- 二、花の吹雪と散り布く中を走り行く。
- 三、形式の末を輕んずれども禮讓の誠意を失はざるをその本性とす。

四、雲ゆけば舟もしたがひ、舟ゆけば雲もまた追ふ。

第七章 動詞の活用(四)二段活用 一段活用

二六 下二段活用は

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(受)け	(給)ふ	く	くる(人)	くれ(ども)

の如く、未然形と連用形と命令形と同じ形なるを特徴とす。而、命令形は必、よ助詞を伴ふなり。

二七 上二段活用も亦下二段に同じ。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(起)き	(給)ふ	く	くる(人)	くれ(ども)

二八 上一段活用下一段活用の形は左の如し。

未然形
連用形
命令形

終止形
連體形

已然形

(著)き(ば)
(蹴)け(よ)(給)と

きる
ける(人)

きれ(ば)
けれ(ども)

これにては未然形と連用形と命令形とは一の形にてあらはし、終止形と連體形とも一の形にてあらはす。而、命令形は必助詞「よ」を伴ふものとす。

二九 文語の上二段活用は話語にては上一段活用となり、文語の下二段活用は話語にては下一段活用となること前卷にいへり。又文語の上下一段活用のものは話語にても亦一段活用なりとす。

問題一、文語も話語も同じ活用の動詞ありや。

- 二、文語にて二段活用の動詞は話語にて如何になれるか。
- 三、奈行變格と下二段活用とを比較せよ。
- 四、上二段活用の各活用を指名せよ。
- 五、上一段活用の各活用を命名せよ。

練習一〇 次の文中の話語をば文語になほせ。

- 一、石膏に白墨と膠とを混ぜて程好く拵へる。
- 二、障子を明けければ庭の山茶花が見える。
- 三、木に縁つて魚を求めよるよりも難い。
- 四、旅行の時間に後れる時は困る故明朝は五時におきる。

練習一一 次の動詞の各活用を用ゐて文をつくれ。

- 一、煮る。
- 二、研究す。
- 三、學ぶ。
- 四、與ふ。

第八章 動詞の活用(五) 良行變格活用

三〇 良行變格活用動詞はそのうちに種類あり。先「あり」は存在をあらはすものなるが故に之を名づけて存在動詞といふ。存在動詞の活用は大體に於いて普通の四段活用に全じけれど、その終止形は連用形と同じ形なるを異なりとす。

未然形

終止形
連用形

連體形

已然形
命令形

あら(ば)

り(難し)

る(人)

れ(ども)
(よ)

三一 「あり」は上に形容詞をうけて之と合併して「かり」といふ形にて活用することあり。

産物は國々の習慣風土によりて同じからず。封建時代には實業の輕視せられし事甚しかりき。

稗を食料に用ゐるには糠を去ることなかれ。

蛇を甚短しといへども蚯蚓よりは長かるべし。

かくの如きを便宜上形容動詞といふ。こはその活用の用法乏しく「かり」は終止形としても連用形としても通常には用ゐることなく、僅に助動詞に接するのみなり。

未然形

終止形
連用形

連體形

已然形
命令形

多 から

かり

かる(人)

かれ(ども)

三二 「あり」は又上に來る四段活用左行三段活用の動詞と合併して「びり」「せり」「てり」「へり」「めり」「れり」となることあり。

後は青蘆さやくとそよびり。

父は非常なる勤勉家にして多少の蓄財をなせり。

一人の老翁こなたをながめて立てり。

鶏を飼へり。一羽の牝鶏巢につき卵をかへし五六羽の
ひよっこをうめり。

こゝに於いて農業はじめて世に起れり。

庭の眞砂いつしか霜置けるやうに白みぬ。

勤儉と慈善とによりて徳行を示せる結果なるべし。

板を浮べて手に持てるは泳がむとする人なり。

彼が行へる善事は一二に止まらず。

かすめる空に月朧なり。

以上は四段の例にして次は左行三段の例なり。

魚貝を捕へてその食料とせり。

これ亦貯蓄の法に基せるものなり。

これらの動詞をば又稱して動作存在動詞といふ。この動詞

は普通文にては終止形と連體形とを用ゐ、稀に已然形を用ゐるなり。

終止形

連體形

已然形

(勉強せり)

る(人)

れ(ども)

今日は社會の進歩著しくて人智開發の機關も完備せ
ればその人の心がけ次第にて立身出世をなしうべし。

三三 「なり」は他語を伴ひて説明の用に供する働を有する
動詞なるが故にこれを名づけて説明動詞といふ。而、この外
になほ一の説明動詞あり、「たり」これなり。

豪傑たり哲人たるを望まむはもとより不可なし。され
ど豪傑ならむとしてえせ豪傑となり、哲人ならむとして
生物識となるは不可なり。

この動詞の活用は存在動詞に同じけれども、連用形は普通には用ゐず、僅に助動詞につゞくるのみなり。

未然形

(連用形) 終止形

連體形

已然形 命令形

(豪傑)

なら たら

なり たり

なる (人) たる

なれ (は) たれ (ども)

三四 「あり」は話語にては全く四段活用に同じ。又動作存在動詞は話語にはなし。説明動詞の「なり」「たり」は稀に「遙かな」「どいふ連體形を残す外である」となりて「ある」の職分となり、なほ「だ」といふ形にもなれり。形容動詞はその活用僅に「よからう」「よかつた」といふ如き形にて残れり。

問題一 普通の四段活用と「あり」の活用との區別をとけ。

二、形容動詞とは何か。

三、動作存在動詞とは何か。

四、説明動詞とは何か。

練習一二 次の文中の良行變格の各種類を指名せよ。

一 國民たる者各國に盡すべき務あり。

二、この一語よく自家を知れる者なり。

三、事務員たるものは勤勉精勵なるを要す。

四、さわがしかりし蟬の聲は松蟲鈴蟲の聲とかはれり。

練習一三 次の文の話語を文語になほせ。

一、さてさて感心な少年だ。

二、日章旗はわが大日本帝國の國旗であります。

三、世の中が開ければ開ける程便利な事が多くなる。

四、博物館には有益な参考品が多くある。

問題五、命令形のある動詞となき動詞とを區別せよ。

六、命令形に「よ」を添ふべき動詞と添ふるに及ばぬ動詞とを區別せよ。

七、連體形の用法をとふ。

八、終止形に於いて文語と話語との差を認めらるべき種類の動詞は何か。

練習一四 次の文中の動詞の活用の種類と形とを説明せよ。

一、吉田に至り川内川の上流なる眞幸川を渡る。

二、處々に緑林の塊をなせるがあれども大方は秋草靡々たる郊地なり。

三、皇國の興廢この一戦にあり各員一層奮勵努力せよ。

四、滿峽の曉霧全くはれつくし、燦然たる日光は四山の金翠を射る。

練習一五 次の文に適當なる動詞を補ひ、その何活用なるかを述べよ。

一、正しき道によりて青雲に〇〇者〇〇ば之を妨げず。

二、汽車顛覆箒川に〇〇〇〇數多の死傷あり。

三、〇よ蜘蛛の巢を〇〇蟻の丘を〇〇をこれその本能〇〇。

四、工夫と〇〇事は學問に最肝要〇〇ば何卒十分に工夫〇〇たき

事〇〇と〇。

第九章 形容詞の活用

三五 形容詞の活用も又大體動詞の如き用ゐる方を有す。しかれども、命令形を有することなし。

若分量あまり多くば之を減ぜむ。 (未然形)

(普通文には、くばを、くんばとすること多し。)

多くなくてかなはぬものは、實用の材なり。 (連用形)

都會ははでやかなり、花やかなり、娛樂多し。 (終止形)

あまり多きを要せず。 (連體形)

これ人多ければ、業もまた盛なるによるなり。 (已然形)

未然形	終止形	連體形	已然形
く	し	き	けれ

三六 形容詞は文語にてもくづれたる形を用ゐることあり。話語にてはそのくづれたる形を用ゐるを普通とす。

未然形

連用形

終止形

連體形

已然形

善く(は)

善う

善い

善けれ

楽しく

樂しう

樂しい

樂しけれ

かくの如く未然形と連用形とは別にして終止形と連體形とは共に「い」の一なりとす。而「賤し」樂し」の類は文語の終止形には語尾の「し」をとらぬに話語にては共に「い」を添ふるなり。
三七 「如し」といふ形容詞は話語にては用ゐることなし。

問題一 形容詞の活用を命名せよ。

二、形容詞の連用形の種々の用法をあげよ。

三、形容詞の準體言は何の形よりつくるか。

四、話語の形容詞の活用を説け。

練習一六 次の形容詞の活用を命名せよ。

一、更にその差の甚しきものあるを感ぜり。

二、げに世の海は波高く、風また強し。

三、男子五尺の身爲すなくんば即ちやむ。

四、そのこれあるは全くなきにまさる。

五、物價たかければ出費多く、交際繁ければ萬事うるさし。

練習一七 次の形容詞の各活用を用ゐて句をつくれ。

一、清し。

二、樂し。

三、如し。

第十章 助動詞(二) 未然形附屬のもの

三八 助動詞はその所屬の活用形に基づきて三類とす。未然形附屬のもの、連用形附屬のもの、終止形附屬のもの、これなり。未然形附屬のものは「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「ず」「む」なり。

三九 まづ静まれよ。

城陥る前に遁れいで給ひしが賊に捕はれ給ふ。
坊主山の早蕨かとも怪まる。
人に問はるゝ時いかゞ答へむ。
自ら信ずる者は毀らるれども怒らず。

「る」は四段活及變格活用に附屬して受身又は敬意をあらはす。その活用は下二段なり。

未然形 連用形 命令形

終止形

連體形

已然形

れ(ば)(給ふ)(よ)

る

るゝ(もの)

るれ(ば)(ども)

四〇 ともかくも試みられよ。

徴せられて士班に列せらる。
眺めらるゝは故郷の空なり。

「らる」も亦受身又は敬意をあらはし、下二段の活用なり。而、三段活用二段活用一段活用の動詞にのみ附屬す。

未然形 連用形 命令形

終止形

連體形

已然形

られ(ば)(給ふ)(よ)

らる

らるゝ(人)

らるれ(ば)(ども)

四一 早くこの薬をのませよ。

茶屋に腰うちかけてラムネを抜かせ榮螺をやかす。
青きは和ぎたるを知らするなり。
母子に朝早く起きさす。
叡山に行幸せさせ給ふ。

大工にこの家を建てさするは我が父なり。

「す」も「さす」も共に使役又は敬意をあらはして下二段に活用す。而「す」は「る」の如く四段活用變格活用に附屬し、「さす」は「らる」

の如く三段活用二段活用一段活用に附屬するなり。

未然形	連用形	命令形	終止形	連體形	已然形
せ	す		す	する	すれ
させ	さす		さする	さする	さすれ

四二 國民をして天を仰がしめよ。

これを憐みて金を償ひ歸參することを得しむ。

その幅狭く大船を出入せしむるに足らず。

「しむはす」さすに同じく使役又は敬意をあらはし、形も亦下二段にして一切の動詞に附屬す。

未然形	連用形	命令形	終止形	連體形	已然形
しめ	しむ		しむる	しむる	しむれ

四三 争を好むは勇にあらず、眞の大勇は人ともものを争は

ぬものなり。

これを想うて肅然として襟を正しうせずばあらず。

人は青蘆にかくれて見えぬど四ツ手網は確に見ゆ。

「ず」はすべての動詞に附屬し、打消の意をあらはす。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ず	ぬ		ぬ	ね

四四 よしさらば余は君が保護者たらむ。

兄の子に家を譲らむ志この時より起させたまへり。

「む」は普通には終止連體の二用を「む」にてあらはす外活用なし。豫定の意をあらはす。

四五 「ざりはず」の類にして存在動詞の形を有す。されど終止形を有せず。

未然形

連用形

連體形

已然形

ざら

ざり

ざる

ざれ

問題一、動詞の未然形に附屬する助動詞は何か。

二、受身をあらはす助動詞の活用及うけ方を述べよ。

三、使役をあらはす助動詞の種類活用及うけ方を述べよ。

四、打消をあらはす助動詞の活用をのべよ。

五、豫定をあらはす助動詞の活用をのべよ。

六、「ざり」といふ助動詞の成立及活用をのべよ。

練習一八 次の文中の未然形附屬の助動詞の意義と活用とを説明せよ。

一、富國の策を講ぜずして可ならむや。

二、主人の氣に入りて愛せらるゝこと大方ならず。

三、長じて勘當せらるゝ子は概して甘やかされて育てられたるものなり。

四、家貧にして自活せざるを得ざる少年の境遇はこれ天その人を

して玉成せしむるの機を與へたるものにあらずや。

練習一九 次の助動詞の各活用を用ゐて文をつくれ。

一、む。

二、ず。

三、しむ。

第十一章 助動詞(二) 連用形附屬のもの

四六 動詞の連用形につく助動詞は「き」「けり」「たり」「ぬ」「つ」の五なりとす。

四七 うれしかりし事どもなり。

貧窮甚しかりしかば上方に往きて身を立てむと思ひ

き。

「き」は過去を回想する意をあらはし活用三あり。

終止形

連體形

已然形

き

し

しか

四八 この助動詞の連體形「し」は左行三段活用に限り、未然形につくものなり。

○ 今まで無禮せしは過なり。

四九 友は詞はなくてたゞ頻にうちうなづくなりけり。之を傳へきゝける將士皆王の赤心と大膽とに驚けり。砂漠の中に出てければその困苦いふべくもあらず。

「けり」も亦回想をあらはし、終止連體已然の三形あり。

終止形

連體形

已然形

けり

ける

けれ

五〇 過を知りたらばそを補はむとつとむべし。

恰も筭に落ちたる野獸の身をあせりて上らむともがくに似たり。

花は見頃は過ぎたれども、なほ七分の句あり。「たり」は事件の完了せる意をあらはすものにして未然、連用、終止、連躰、已然の五形を用ゐるなり。

未然形

連用形

連體形

已然形

たら

たり

たる

たれ

五一 月影はやうやくわがもとに來りぬ。

「ぬ」も亦事件の完了せるをあらはすものなるが、古風の詞にして多くは美文に於いてし、而、終止の形のみ用ゐらる。

五二 曙光は見えそめつ。

「つ」も亦事件の完了せるをあらはすものにしてこの終止形を用ゐるは古風を模する美文に多し。しかるにこれが連用形なる「て」は單に決定の意をあらはし、用法極めて廣し。

頭の方太く尻の方尖りて西洋の獨樂に似たり。
波瀾と上下して走る。

この「て」に限りて形容詞の連用形につくことあり。

柄は短くても可なり。

これは中間に「あり」を省きたるものなり。又「にて」といふことあり。

花は紅にて葉は緑なり。

内地にては金澤地方にてこれを培養せり。

「にては」に於いて「にありて」によりて「にして」等の動詞を略したるものなり。

問題一、動詞の連用形につく助動詞をあげよ。

一、「さ」といふ助動詞の意義及活用をのべよ。

三、「けり」といふ助動詞の意義及活用をのべよ。

四、「たり」といふ助動詞の意義及活用をとよ。

五、「ぬ」といふ助動詞の意義及用法をとよ。

練習二〇 次の文中の助動詞の意義と活用又は用法を説明せよ。

一、瀾浪を遮らむとするに似たり。

二、彼がスコットと相知るを得たるはこの際の事なりき。

三、他人の作りたるものによりて利益を占めむと思ふが如き考にては到底不可なり。

四、司法大臣もともに驚かれ、即ち秘書官をして君を訪問せしめ、速に療養あらむことを勧められたり。

第十二章 動詞の音便

五三 助動詞「て」(話語の「た」)を四段活用及變格活用の語につ

づくる時は發音上の變化あり。之を名づけて動詞の音便といふ。

五四 (キ)これに就いて面白き話あり。

(ギ)仰いで天に愧ぢず、俯して地に愧ぢず。

「カ」行の四段活用の連用形は「て」につゞくる時「い」となることあり。若「き」が濁音なるときは下の「て」に濁音をうつす。これを「い」音便と稱す。

五五 (ヒ)人々争うて難に赴く。

「ハ」行四段の「ヒ」は時として「う」となりて「て」につゞく事あり。之を「う」音便と稱す。

五六 (ヒ)飛んで火に入る夏の蟲。

(ミ)夕には月を踏んでかへる。

(ニ)死んで謝するより道なし。

「ハ」行の濁音及「マ」行の四段并に奈行變格の連用形は「ん」となりて「て」を濁らすことあり。之を撥音便といふ。

五七 (チ)勝つて兜の緒を締めよ。

(ヒ)誓つてこの耻を雪がん。

(リ)凝つては百鍊の鐵となる。

(リ)命あつての物種。

「タ」行「ハ」行「ラ」行の四段及良行變格の「あり」「かり」の連用形は「て」につゞく時に促音となることあり。之を促音便といふ。

問題一、動詞の音便は如何なる動詞と助動詞との間に行はるゝか

二、動詞の「イ」音便を説明せよ。

三、「て」が「て」に變ずる音便を説明せよ。

四、動詞の促音便を説明せよ。

第十三章 助動詞(三) 終止形附屬のもの

五八 動詞の終止形につく助動詞は「べし」「まじ」「べから」なり。

五九 「べし」は形容詞と同じ活用を有す。

未然形	終止形	連體形	已然形
連用形	べく	べし	べき
			べけれ

而、この「べし」は種々の意義をあらはすものなり。

古寺の庭に紅つやゝかなるは若楓なるべし。

かく推量をあらはすものと

以てその注意深きを見るべきにあらずや。

の如く可能の意をあらはすものと

事務を取るには瑣事たりとも仔細に吟味すべし。

の如くそれが適當なることを示すものあり。又

人は必道德を守るべきものなり。

の如く義務の存することをいへるものあり。

六〇 「まじ」も亦形容詞と同じ活用を有す。その事實の存在

せぬことを推量する意をあらはせるなり。

未然形	終止形	連體形	已然形
連用形	まじく	まじ	まじき
			まじけれ

かばかりの事驚くにもあたるまじ。

よも忘れはすまじ覺悟せよ。

六一 「べし」と「あり」と合併せるべから「は普通文にては「ず」又は「ざる」に接する用法のみなりとす。その意は「べし」の如し。

造次顛沛にも忘るべからざる訓言にあらずや。
縷々として絲網を放つこと幾千萬條たるを知るべからず。

六二 「べし」「まじ」「べから」は普通の動詞には終止形に附屬するものなれど、良行變格の各種類には連體形に附屬するなり。但動作存在動詞には附屬することなし。

今十日の後なるべし。

かくいはれて耻ぢざるものはなかるべし。

さることはあるまじ。

今兩雄共に鬪はゞ勢必俱に全かるべからず。

天の力は無量にて、その秘密には際限あるべからず。

考察は長かるべく、決斷は速なるべし。

問題一、動詞の終止形に附屬する助動詞をあげよ。

二、存在動詞の連體形に附屬する助動詞は何か。

三、「べし」の活用の例をあげよ。

四、「まじ」の意義を説明せよ。

五、「まじ」の意義と活用とを説明せよ。

六、「べから」の用法を説明せよ。

練習二二 次の文中の助動詞の意義と活用及用法を説明せよ。

一、立身出世の最大要素は何なるべきか。

二、家貧しかりしかば賤しき業を厭はず稼ぎたり。

三、高尚なる業に至りてはとふべき限にあらざるなり。

四、いづれも多少の損害を受けしも幸に大ならざることを得たり。

五、いかなる利便を社會に與へたるかの一斑を知るに足るべし。

練習二三 次にあげたる活用の助動詞を用ゐて適當なる文をつくれ。

一、「べし」の已然形。

二、「まじ」の連用形。

三、「べから」。

四、「つ」の連用形。

練習二四 次にあげたる助動詞の各活用を用ゐて適當なる文を作れ。

一 下二段動詞と「べし」。

二、サ行三段動詞と「き」。

三、サ行三段動詞と「らる」。

四 上一段動詞と「しむ」。

第十四章 語の順序

六三 動詞の次に助動詞あるが如く、國語にて文章をなすときには語の排べ方に一定の順序あり。次にその大要をあぐ。

六四 月清し。

菊の花さきたりき。

右の如く、主語は第一位にあり。述語は最下に位するものなり。述語が動詞と助動詞との連合にてなる時は決して離る

ることをえざるものなり。

六五 政府は紙幣を發行す。

彼は身代をその子に譲りたり。

古の名將は士卒と艱苦を同じくす。

右の如く補語は述語の上、主語の下にあるを以て一般の法則とす。しかれども、補語多くある時はその互の位置は上下一定の法則なし。

彼はその子に身代を譲りたり。

六六 飛沫は霧の如し。

その禮儀は至つて正しきが如し。

形容詞「如し」の補語は「ごとし」の上に直に接して決して離るゝことなきものなり。

六七 資本は貯蓄の結果なり。

異なる郷の珍らしき花禽を目にす。

一世を驚かすの事業を成し遂げむと心がけるたり。

連體語はすべてその對手たる體言の上にあるものなり。

六八 すべて助詞はその助くる單語の下にありて離るゝ

ことなきものとす。

我は汝を愛す。

雲きたれども、雨とならず。

六九 主語と補語と述語との位置は時によりて顛倒せら

るゝことあり。これらは多くは歌謠又は美文にあらはるゝ

ものとす。

來れ、我友。

誰か知らん、遠征の志を。
知るべし、松が民人の性情を感化するの極めて大なる
を。

請ふ、賛成あらむことを。

七〇 連體語又は準體言となれる動詞の補語は顛倒せら
るゝことなきものなり。

彼は實に今その手腕を試みむとする者なり。

問題一、國語にては語の順序に一定の法則ありや。

二、離すべく又は動かすべからざる順序なる語の關係をあげよ。

三、主語と補語と述語との位置につきてのべよ。

練習二五 次の各語を普通の順序に改めよ。

一、忘るなよ、父母の恩を。

二、幸福なり、この時期に遭遇せるの日本人は。

文 部 省 檢 定 濟

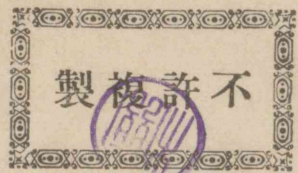
- 三、中に思あれば、外に色あらはる。
- 四、痛快なるかな言や。
- 問題四、動詞の音便とは何か。

- 五、動詞の各の活用形につきて附屬すべき助動詞をあげよ。
- 六、單文と重文と合文との區別如何。
- 七、連體語とは何か。
- 八、準體言とは何か。
- 九、用言にてなれる連體語と準體言とは如何にして區別するか。
- 一〇、句とは何ぞ。

中 等 文 法 教 科 書 卷 三 終

明治四十年五月五日印
 明治四十年十二月廿八日發行
 明治四十年十二月廿五日訂正再版發行

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五
拾五錢	拾八錢	拾五錢	拾八錢	拾五錢



著 者 山 田 孝 雄
 發 行 者 大 葉 久 吉
 發 行 者 吉 岡 平 助
 印 刷 者 青 木 弘

發 行 所

東京市日本橋區本石町三丁目
 大阪市東區備後町四丁目

寶 文 館



